

美術の窓(25)

晩年の北斎

—人間世界から宇宙界へ—

大和文華館館長 吉川 逸 治

北斎は七十五、六歳のころ、富嶽三十六景、諸国瀧廻り、名橋一覽、千絵の海など、一連の優れた彩色版画集を連続して発表し、風景版画家としての名声を博するが、これ以後、色刷版画の制作を殆んどやめて、ふたたび、白墨刷りの読本類の挿絵の技巧、構想の独創的発案に凝って、この分野の創作活動に熱中する。

これと同時に、肉筆画の写実の迫真性、彩色の精選に精進し、その細緻、的確、強靱な筆蹟は八十歳から九十歳へと進む高齢な老人の所業とは推量しがたきほどの完璧さに達する。

これら二つの領域、紙の白地に記す細線映像と、精美な彩色画像とは全く別個の相容れざるものと想像し易いが、表面的な被覆を取去って見ると、相通ずる一つの全体的映像が露れてくる。ふたつながら、西欧十九世紀美術が目標として開拓してきたところで、現実生活の厳しい実写と、深奥な内的思考の映像の露呈との両極端の開拓に着手して、長年の研精の最終段階において、両者の合一を達成す。

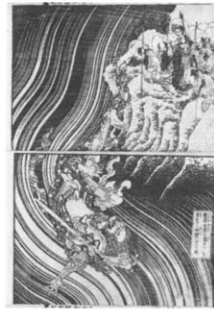
彼の風景版画の一大集成は、千変万化する自然の豊富な実景の背後に、それらを創造し、かつ統一する超絶的な原理、原則を徐々に感得せしむる(幾何学図形の統制や流水の力学的形成など)。彼が風景版画や読本挿絵の制作の合間に

ものせる花鳥の画像は、また彼の自然誌図譜を成し、大きな世界像の重要な一翼を占めることとなる。

次々に作家、文人がものする書作に協働させる挿絵制作は、濃墨描線が西洋銅版画の刻線のごとく、鋭く細かく対象を紙面に刻みつけ、しかも紙の白地は時に目醒めんばかり明い環境を提供し、時に漆黒の暗夜の情景、さらに妄想狂乱の心中の闇を窺いさせ、読者の肺腑を抉る。

彼は霊界との交流を身近に感じさせる。古来、国土に充滿し、社寺の高僧、神官、宮廷人らの書き留めし霊界の物怪、悪霊、怨魂が彼の容赦なき鋭筆に暴かれて、頻繁に紙面に現れ、庶民の心を驚かす。同時代の血腥ぐさい場面のみではない。高遠な霊界まで彼の想像力は踏破する。

釈迦御一代記図会(1845年刊行、北斎86歳)の挿絵の中で、天上の諸神の群が驚嘆する中を、二つの大龍の口から奔流、下降する霊水の瀧を浴びつつ、誕生したばかりの童子釈尊は唯我独尊と叫んで、宮殿内外の人々の讃仰を受ける。また、八面九足の霊鬼の巨軀が山嶽を満たすなかに前生の釈尊は覚悟静坐して、偈文の教示をまつ。あるいは、大流水の流れ下る曲線中に罰せられし提婆達多はまっさかさまに地獄に墮ちる(挿図)。暴君は宮廷群臣もろとも激しく渦巻く水流にのまれて散乱滅す。釈尊伝を



釈迦御一代記図会



小布施屋台天井画 怒濤図



菊図

かくまで、絶対的な宇宙映像のうち把握せる画家、文人がこれまで存在したか。

ここで、最後に、長野県小布施の北斎館に納められた二台の山車屋台の天井を飾る極彩色の天井板それぞれ一対と、二軸の美しい菊花の掛軸について、北斎晩年の画想と画技について語らねばなるまい。

二台の山車の天井板の彩色は、いずれも彼独特のさかまく波濤のデザインを枠とし、主体とする。波濤の運動は、ここでは宇宙創造の役割を担当する原因となって描出される。宇宙創造の水波の大円輪にかこまれた真紅の天空に霊龍が頭を中心に胴体をS字形にくねらせ、長い尾を巻き、いきいきと創造の作業に従事す。

次の天井板は、暗黒色の空間に、緑と真紅、暗血色の羽毛に包まれた孔雀風の霊鳥が、大きな赤い鶏冠に嘴の鋭い頭を中心に長い暖黄色の尾翼に巻きこまれるごとく旋回する。さきの龍よりも、不思議な激しい力を暗示する。

さらに、他の山車の一対の天井画が豊かな形像を創出して続く。ともに、濃紺色の水を満たし、表面に北斎流の青白の激浪の渦巻く図柄で、その周囲、四辺の細長い縁枠に細かく様々の植物、動物が描かれる。花あり、果実あり、鳥あり、獣あり、しかも片隅に有翼小童が出現する(挿図)。いまだ肉體なき

精神のみを核として人類の誕生する瞬間を示すのか。この一連の天井画で、北斎は宇宙像を創造し、しかも、漠然たる抽象形象ではなく、的確明瞭な画像としてである。

さきに挙げた釈迦御一代記の表紙に、北斎は空、風、地、水、火と諸元素の名を記し、また、北斎と称し、戴斗と称すも北極星である妙見信仰に拠ると。北斎は浮生塵世にあって、不動、不滅の軸点の存在を信じ、この堅固な宗教的精神が著しい。

また、小布施には、北斎八十八歳の時の菊の絵二軸あり、その色彩の精妙、形姿の正確、高雅絶妙の造化の美を賞讃する(挿図)。ここで、北斎は「花」によって、造化がわれらの眼前に美を提示し、美の宝玉を授与せることを教授す。心に感謝、感激の念を促すこれら二軸の花の画像は、花を養育支持する緑葉と軸の充実した形態の強靱さに広大な大地の恩恵を暗示し、眼をあげて、菊花の豊麗さを再び賞味すれば、天の光線が全幅を満たし、花卉の隅々まで行き渉る微妙さに魅せられる。

こうした作品を目にすれば、十五世紀以来、数々の深刻精妙な油彩画の名作を生んだ西欧絵画史の豊かな世界でも北斎の芸術が今日依然として、敬意をもって注目せられる理由が解る。